

東京学芸大学「算数数学授業研究プロジェクト」ニュースレター Vol. 1 (2011年7月)

講演会「日本の授業研究に期待すること」

開催報告

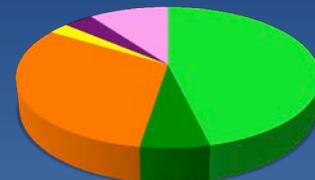


2011年6月22日

17:30~18:30

於 東京学芸大学C401

80名以上の参加がありました！！



- 大学生 (37名)
- 大学院生 (5名)
- 附属学校教員 (25名)
- 公立学校教員 (2名)
- 大学教職員 (3名)
- その他 (JICA等より、8名)

本日の講演会に参加して日本の授業研究について新しい発見や見直すことはありましたか？



- あった (70名)
- 特になかった (6名)
- 無回答 (4名)

日本の授業研究が海外から注目されていると聞いたことがありましたか？



- 聞いたことがあった (62名)
- 何となく聞いたことがあった (10名)
- 知らなかった (7名)

東京学芸大学数学科教育学研究室では、文部科学省の特別経費「国際算数・数学授業改善のための自己向上機能を備えた教員養成システム開発」(国際算数数学授業研究プロジェクト)を2011年4月からスタートさせました。このプロジェクトでは、国内外の研究者の協力を得て、大学における教員養成ならびに、現職教員の研修・研究の一層の充実をはかるための教員養成システムの構築を目指し、研究を進めております。

このプロジェクトの一環として、授業研究に関する研究で卓越した業績をあげておられるキャサリンルイス先生、アメリカで活躍する数学教育学者のタッド渡辺先生、吉田誠先生をお招きし、講演会「日本の授業研究に期待すること」を開催いたしました。講演会の様子をお伝えいたします。

講演者紹介



キャサリン ルイス先生
Catherine Lewis, PH.D.
ミルズ大学 (Mills College: 米国カリフォルニア州) 主任研究員。

ハーバード大学 (社会心理学) 卒業後、スタンフォード大学において博士号取得 (発達心理学)。ミルズ大学授業研究グループ代表として、授業研究を中心に教師教育に関する研究を推進する。アメリカにおける教師教育研究の第一人者。特に、授業研究の過程における教師の成長や授業研究のメカニズムに関する論文は世界中で引用されている。



渡辺 忠信 先生
Tad WATANABE, PH.D.
ケネソウ州立大学 (Kennesaw State University: 米国ジョージア州) 理学部 (数学教育) 教授。高校卒業後渡米、フロリダ州立大学で博士号取得 (数学教育学)。日本の小学校算数カリキュラムや授業研究に関する論文をはじめ、多くの論文を執筆。分数の指導、割合の指導などに関する日米の比較研究の第一人者。東京書籍の算数教科書の英訳プロジェクトの一員。

州) 理学部 (数学教育) 教授。高校卒業後渡米、フロリダ州立大学で博士号取得 (数学教育学)。日本の小学校算数カリキュラムや授業研究に関する論文をはじめ、多くの論文を執筆。分数の指導、割合の指導などに関する日米の比較研究の第一人者。東京書籍の算数教科書の英訳プロジェクトの一員。



吉田 誠 先生
Makoto YOSHIDA, PH.D.
ウィリアムパターソン大学 (William Paterson University, 米国ニュージャージー州) 授業研究センター長。Global Education Resources 創設者、会長。米国で授業研究を広めた研究者の一人。高校卒業後渡米、シカゴ大学にて教育学博士号取得。博士論文のテーマは「日本の授業研究」、その研究成果は、「Teaching Gap」の第7章で引用される。東京書籍の算数教科書の英訳プロジェクトの一員。

研究センター長。Global Education Resources 創設者、会長。米国で授業研究を広めた研究者の一人。高校卒業後渡米、シカゴ大学にて教育学博士号取得。博士論文のテーマは「日本の授業研究」、その研究成果は、「Teaching Gap」の第7章で引用される。東京書籍の算数教科書の英訳プロジェクトの一員。

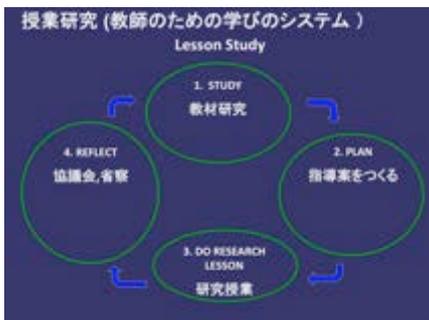


キャサリンルイス先生による講演

* 講演は日本語で行われました。文脈を整えるため、一部の発言に微修正を加えてあります。

私は、国際的に日本の小学校教育の良いところは認められていても、日本のなかでは十分認められていないのではないかと考えています。皆さんにとっては釈迦に説法（注；キャサリン先生の日本語力に会場から驚きの声があがる）かもしれませんが、今日は、授業研究に焦点を当ててお話をしたいと思います。

まず、授業研究を英訳すると、「Lesson Study」、研究授業は「Research Lesson」または「Study Lesson」と言われています。“The Teaching Gap”(出版：Free Press, 1999)第7章で Lesson Study が、米国だけではなく国際的に紹介されました。米国で授業研究と言うと、教材研究で始まって、指導案を立て、研究授業を行って、協議会を行うというサイクルを考えている人が多いようです。



次に、米国での Lesson Study の広まりについてです。きちんとした統計はありませんが概ね次のとおりです。

- * 2000年：米国で初めての公開研究授業
- * 2004年：335校 2300名の教師が授業研究
- * 2006年：647校 3610名の教師が公開研究授業

東海岸、西海岸、シカゴなどでは毎年大きな授業研究の会議を実施していますから、全国で授業研究を実施する人は2006年以降も増えていると思います。ちなみに去年 WALS (World Association for Lesson Study) の会議にはいろいろな国からの参加者が集まりました。

またどのように米国で Lesson Study がアダプテーションされているかということも、大きな問題だと思います。カリフォルニア巻きというのはカリフォルニ

アで発明されました。あまりにもおいしいから日本に逆輸入されたくらいです。うちの子どもは小学校2年生の時に4ヶ月間ほど日本に滞在しており、ピーナッツバター寿司というものを発明したのですが、それは二度と食べたくないものでした。米国の授業研究はどこに似ているのかということは大きな問題だと思います。

ここで、米国で授業研究をする上での大きなチャレンジを3つ述べていきたいと思います。

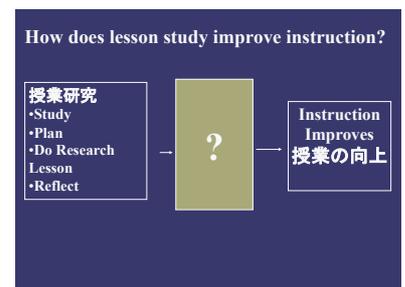
1つ目のチャレンジは、やはり授業研究はどのようなものかというのを理解することです。Lesson Study が指導案を磨くものだと、誤解されていることがよくあると思います。また、授業研究が基礎研究のようなものと誤解している人も多くいます。

例えば、ある学区の一番偉い教育委員会の人が、先生方に各単元の算数の指導案を作る課題を出しました。「一番良い指導案には1000ドルの賞金を出します。一番になった指導案を参考に良い指導案の作り方を学び、授業研究を盛んにして行きましょう」という考え方を出したのです。指導案を作ることだけが授業研究であるという考えでは、授業研究そのものをダメにしてしまうように思います。米国では、やはり指導案が授業研究の大事なプロダクトだと思っている人が少ないと思います。その考え方では先生間の協力関係を崩してしまうのではないかと、思いました。

2つ目の誤解、授業研究が基礎研究だと考えていることについてですが、例えば指導案を書いたときに、1カ所だけ変えるべきだと思う人がいます。「いろいろな箇所を改善するとどこを良くしたことによってその授業が直ったかというのがはっきりわからないから、1カ所だけ変えるべきだ」と。

ですから、指導案だけではなく、何が変わることで授業研究が授業を向上させたのかということが、一つの大きな問題になります。

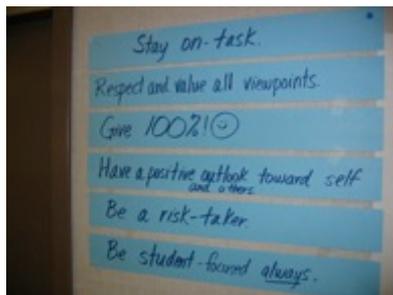
ここでひとつ、「？」の部分に何が入るか考えてみてください（右図）。授業研究に



より、どういう道のりで授業が向上するかという問題です。米国だと、指導案向上によって授業が良くなると思われていますが、（それは間違っていないのですが）それだけではないと思いますね。例えば教師一人ひとりの知識や、信念やスタンスなどでも変わると思いますし、教師の共同体のあり方でも変わると思いますし、教材研究のあり方でも変わると思います。

2つ目のチャレンジは、共同活動の文化を育てることです。米国の学校文化は英語で Egg tray culture と言って、卵の箱に入っているという文化だと言われています。米国の卵の箱は非常に分厚いもので卵と卵が絶対にぶつからないようにできているのです。日本だと薄いプラスチックでできていますね。とにかく、先生と先生があまりぶつからない学校文化というのが、米国には多いと思います。それに対してどういう方策をとったら良いのかというのは、米国で非常に問題となっています。米国の現場の先生の授業研究のやり方を見ると、例えば、どんな授業研究グループになりたいかという約束をみんなで作って、その約束を守っているかどうか反省する、ということがよくあります。

毎回の会議の反省は日本では常識的なものだと思いますけれども、米国だと結構大きな目標になるのですね。例えば、「努力100%」とか、

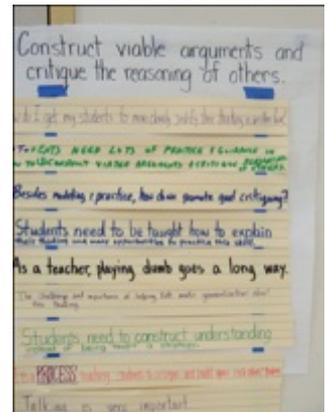


「ポジティブに自分も同僚も見ろ」、「子ども中心に動く」、なども（上写真）。カリフォルニアで授業研究をやっている先生100人のアンケートの結果（2008年）を見ると、70%近くはずっと決まった人がファシリテーターをやっていることがわかりました。それは日本とは少し異なると思います。

また、アメリカの教師は他の教師の教室に入ると手伝いたがります。ですから手と口じゃなくて、目と耳を使おう、子ども中心にデータを取ろう、とよく言われます。やはり先生を評価する文化ですから、子ども中心にデータをとるのではなく、先生のやっていることを評価するという文化が非常に強いです。それを変えるというのは1つの大きなチャレンジですね。

これは先日、カリフォルニアの21学区から Lesson Study チームが集まったときの省察です。上に書いてある、“Construct valuable arguments and critique the reasoning of others” というのはアメリカで新しくできた Common core states standards（全米

統一カリキュラム）の1つの目標ですが、筋道をたてて自分の意見を論理的に言うことと、他の人の意見を検討するというものです。それが一応授業研究のテーマになっていたのですが、授業研究の1サイクルの終わりに何を学んだかということを先生一人ひとりに書いてもらいました。ここで少し面白いと思ったのですが、“As a teacher, playing dumb goes a long way” と書いた人がいました。“playing dumb”というのは、教師自身が子どもと同じように「自分でわからないからもうちょっと説明して」という感じです。このような感想は日本では本当にいろいろなところで聞いていますが、米国ではほとんど見ないので、そこでそれが出たというのは非常に面白いと思ったのです。また一番下に“talking is very important” とあります

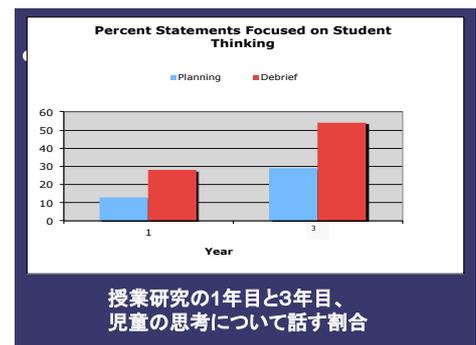


が、子どもの考え方、議論の仕方を育てようと思ったら、先生があまりしゃべらないで、子どもにしゃべってもらおうということも。やはりアメリカでは一方的に先生がしゃべるという授業が日本より多いと思いますから、面白いと思いました。

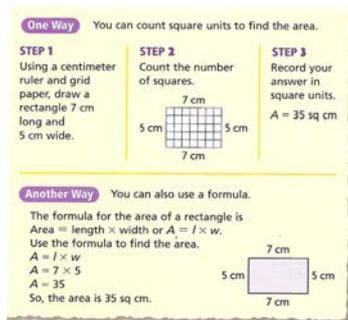
これは（下写真）1サイクルの授業研究で、子どもの思考や子どもの学びについて何を学んだかということと、算数数学の内容について何を学んだかということ、教師たちが反省したものです。



このグラフ（下図）は、児童の思考について話す割合（1年目と3年目の比較）です。青が、研究授業前の会議で、赤が協議会の時の児童の思考に対する話の割合です。



3つめのチャレンジは、やはり専門知識のサポートですね。高橋昭彦先生や吉田誠先生が、教材研究がとても大事だと紹介しているので、米国でその考えは非常に広まっていると思います。ただ、米国の教科書はあまり良い教材研究の材料にならないことが多いです。そのため日本の教科書を教材研究に使ってみることがよくあります。例えば長方形の面積の導入ですが、米国の教科書（下写真）にはやり方が二つ書いてあり、一つは長方形を四角にわけてその四角を数える方法ですが教科書のなかで長方形に線が引いてあり、その単位も書いてあるのです。もう一つのやり方は、縦×横の説明なので、あまり良い教材研究の材料になりません。もし先生がその式の基礎や理由がわからなければ、これを読んでもわかるようにならないと思います。



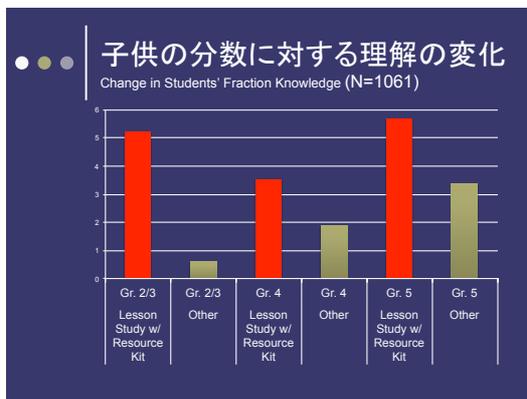
また、分数の導入は、円の分割を用いることや、風船が3つありそのうちの一つを3分の1と言うなどのいろいろあります。日本では長さの単位を使ったものをよく使っていると思います。私は日本の教科書2社と米国の教科書2社ずつを比べてみました（下表）。

	US: Harcourt	US: Investigations	Japan: TS	Japan: GT
Grade 5	Lesson: Area of a Rectangle			
Grade 4	Lesson: Area of a Rectangle			
Grade 3	Lesson: Area of a Rectangle			
Grade 2	Lesson: Area of a Rectangle			
Grade 1	Lesson: Area of a Rectangle			

左の2列が米国の教科書で、下から1年生、次は2年生、5年生まで比較したもので、分数表現のモデル別に色をつけました。例えばピンク色（数直線モデ

ル）は4つの教科書ともあります。これをみると、米国は日本よりも早くから分数を導入しているいろいろなモデルを使っていますが、日本は4つのモデルしか使っていないのです。例えば、円の分割は米国の教科書で使っているのですが、日本では使われていません。また、米国では分数の導入として測定を用いることはあまり見かけません。ちょっと余っているところを1mをもとにして表現してみましよう、という導入の仕方です。これは日本の教科書のおそらく典型的な導入の仕方だと思います。それが後で数直線とか長方形の面積と結びつけられるのですね。教科書の中で丁寧に。

ここで、ちょうど今分析している途中の研究を紹介したいと思います。ランダムに授業研究をやっているグループを3つの条件を視点に比較調査しました。3つの条件とは、①分数に関する授業研究を行い教材研究には日本の教科書などを用いる、②分数以外の内容での授業研究を行う、③授業研究は行わず通常の研修のみを行う、です。①に属するグループでは、日本の教科書の分数の導入に出てくる問題をもう少し難しくした問題を解いて、その問題を解くためにどういう知識が必要かというのを話し合いました。教材研究をサポートする参考資料の中には高橋昭彦先生が米国で分数の導入を3時間教えた際のビデオテープも含まれていました。1サイクル授業研究をしてみて、やはり日本の教材、日本の導入が非常に良いと思った人が多く、日本の教科書の導入のとおり授業をしたグループが多かったです。4ヶ月間で13グループが授業研究を1サイクル行った結果、教師の分数に対する知識が変わり、子どもの分数に対する知識も理解も変わってきました。赤は①の授業研究で教材研究をやったグループ、ねずみ色は②の授業研究だけやってしかもそれが分数に対する授業研究ではなく先生方が自分たちで選んだ研究主題だったグループの結果です（下図）。



ある先生は、「分数を理解するためには非常にいろいろな壁にぶつかることがわかりました。自分も日本のやり方を経験して分数に対する理解が違ってきました」と感想を述べています。さらに、授業研究することによって、分数に対する理解だけではなくて、いろいろな信念も変わってきました。アンケートの結果、授業研究をやってないグループと比較して有意な差が出ました。教師の信念の例として「教師協同学習の効果」「生徒達成度に対する期待」「学者の研究、外国の教科書の授業研究に対する貢献」「子供の思考を授業で把握することの重要性」があげられます。

研修に対する態度も、授業研究をやってグループ(①教材研究をやってグループと、②自分で研究テーマを選んだグループ)は、③授業研究をしないグループよりも、研修がよかった、と述べています。授業研究は日本の独特のものだと思いますけれども、米国でもやはり教師がやってみると非常に良いものだと思う人が多です。例えば、教師の協同学習の効果として、次のような反応がありました(下図)。

“授業研究で何を学びましたか?”
-アメリカの教師の反応
“What Did You Learn?": American Teachers' Answers

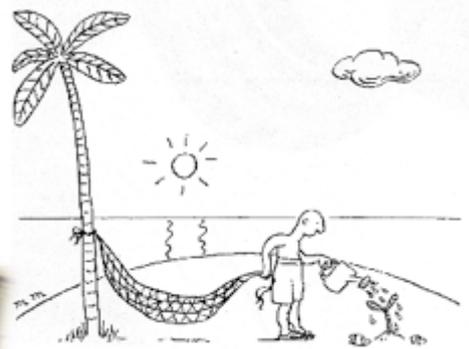
- “私はいつでも成長することができる”
“I can always improve”
- “子どもの目を見るようになった”
“Watch the children's eyes”
- “子どもの好奇心・向上心を大切にしようになった”
“Leave the children a little hungry”
- “間違いは宝”
“Mistakes are treasures”

「授業研究をやったことによって子どもに対する、または授業に対する考え方が変わってくる。」というコメントもありました。

最後に、サンフランシスコの21学区で地域的に授業研究をやって自分の学んだことをシェア/普及させている授業研究プロジェクトを紹介します。自分の学区で1サイクル授業研究をやって、みんなで1年間に1回集まって、公開研究授業をするものです。6年くらい前からその実態を調査研究させてもらいました。その結果、小学校から高校に、ある学校からある学校に、と、いろいろな考え方やいろいろな先生の技術が伝わっていきました。

米国は全人教育ではなくて知識的な面にフォーカスを置いていますから、それがこれからの一つの大きな課題だと思います。また、日本と違って授業研究の成果を教科書に入れるというメカニズムはまだありません。

アメリカの授業研究は、下の漫画のように、本当に小さい芽に水をあげているという感じです。けどすごく天国みたいなところで仕事をしている、そのようなイメージです。



YAHOO!

Silicon Valley Mathematics Initiative's Lesson Study Project
www.svmimac.org

Lesson Study has grown and prospered since 2000

*出典
講演会 PPT「米国における日本型授業研究の現在」
June 22, 2011
Catherine Lewis

渡辺先生のお話

私は日本で生まれ育ってアメリカに行って、アメリカの大学で教えている訳ですけれども、日本の教育、特に算数数学教育に興味をもって、数学教育者の目から見てすばらしいところがあるなと思い、日本の算数数学教育のことを研究しています。

逆に日本の算数数学教育のことをアメリカで紹介する時にはかなり神経質にならなくてはいけないと思うときが多いですね。やはりアメリカの先生方を相手にしていて、多分日本人ではないかと思われる人から、日本は「良いよ、良いよ」と言われるとやはりそれに対して反感を持つ方が少なくはないと思いますね。

もう長いことアメリカの子どもと日本、アジアの国の子どもの算数理科教育などの比較研究などでいかにアメリカの子どもがアジアの子どもに劣っているかということをよく言われてきている中で、いかにも先生方が「おまえらの責任だ」と言われているわけですから、そういう中で比較されることに対して反感をもたれるというのは仕方がないと言えば仕方がない。

そうするとどうしても違いは、「アメリカと日本で文化が違うんだから」という話になるんですね。やはりそういう時に、文化が違うというのをただ単に言い訳にしまってはいけないと思うのです。今日のルイス先生のお話のなかでも、いくつかアメリカの先生方もたれておられる授業への視点として、完璧な指導案を作っていけばいいのではないかと、授業というのは教師の活動であるという見方と、本当に授業というのは教師と生徒／児童と一緒に作り上げていくものだという見方の違いなどがあると思います。それから、児童生徒への見方のちがいが、全人教育、子どもを育てるという見方、なども違うんです。

日本の大学の先生方が本当にうらやましい思うことは、現場の先生と大学の先生とのギャップがはるかに日本のほうが小さいということです。実践者と研究者とのギャップ。アメリカにおける実践者の先生方が大学にいる研究者に対する見方というのはまるっきり、「彼がやっていることは、我々には関係ない」と。確かに大学にいる研究者が自分たちが研究していることがいかに現場に関係があるかということをやうまく説明できていないということは、研究者の責任だと思いますがそういう見方もある。また、研究者の中にも現場に対して軽視する傾向にある。実践者は理論を無視してしまうようなところがあるし、研究者で理論を作っ



ていく人は実践に対しては特に注意を払わないということがあつたりします。私は大学の数学教育の研究者として、現場の実践から学ぶことの多さ、またその有用さというのを本当に学ばせていただきました。やはりそういう面で研究者のほうも変わっていかねばいけないな、と思います。また、アメリカの先生方も現場だけでなく、研究者がやっていることというのは良いところもあるのでそういうところから学んでいこうという意欲を持っていただければと、しばし思います。

グローバルゼーションということはよく言われていますが、本当にお互いからいろいろなことを学べると思います。アメリカの教育は、本当に欠けているところもあると思いますが、良いなと思うところもあります。そういう意味で、日本からの情報もどんどん発信していただきたいですし、また実際にアメリカにきて、アメリカの学校教育について学んでいただき、また直接現場の先生方と交流して学び合うような機会がどんどん増えていけばいいなと思っています。言葉の壁というのは確かにあると思いますが、私はどちらかという英語はコミュニケーションの道具であると思っています。ただコミュニケーションということ考えたときに、伝えたいこと/話し合いたいことははまず必要だと思います。みなさんは先生という一つのプロフェッションで関わっておられるわけで、先生方は日本でもアメリカでも子どもに対しての情熱というのがあると思うんです。そういうものを持っておられるので、それさえあればコミュニケーションは結構できるものだと思います。もしアメリカに来たいという方がいらっしゃればできるだけお手伝いさせていただきたいと思っていますのでご連絡ください。

吉田先生のお話

私はニューヨークの近くのニュージャージー州にあるウィリアムパターソン大学で働いております。そこで授業研究のセンターを作って、大学としてその地域にある学校とどういった授業研究を広める活動ができるようになるかということ、今試みているところです。

授業研究と言えば Lesson Study という言葉はいろいろなところで広がっています。広がるという面では聞きやすい言葉ですし覚えやすい言葉なので、ぱっと一時的に広がった言葉ですけども、ただ言葉だけでは本当の授業研究というものがどういったものか伝えられないので、そこがすごく難しいところです。授業研究というものを理解がうまくできていない現状がアメリカにあります。例えば、1999年頃に授業研究という言葉がアメリカに紹介されたのですけれど

ども、その時点で Lesson Study と言いますと、Bible Study と同じ意味なのです。神が伝えているその言葉をみんなで勉強する、そういう意味がありました。今では Lesson Study とタイプすると授業研究というところにつながるようになりました。

ところで皆さんは日本にいて授業を実際に見る機会や授業について話す機会というのは一年間に何度くらいありますか？やはり結構授業を見ている、授業について話し合いを持つ機会というのは日本の先生では結構あるんですが、私が広島で博士論文を研究していた時に採ったデータでは、小学校の先生では一年間に平均して10回くらい授業を見る機会が学校の中か外であるということでした。それと同じことをアメリカの先生に聞くと、全然手があがらない、ゼロ、ということが多いですね。「授業をみた後どんなことをするのか、協議がありますか」と聞くと、ほとんど協議はないですね。そういうような状態のなかでアメリカでは今授業研究というものが行われています。ですから日本にいれば当たり前のように授業が見られるということが、アメリカではほとんどなされていないという状況です。そういう状態にあって、授業研究が始められてきたということです。始めた時期がだいたい1999年あたりから始まったと思いますから、それから見ても12年くらいの歴史しかないということです。ですから、キャサリン先生が言われたよ

うないろいろな問題がおこっております。

どうして授業研究が難しいかと言いますと、例えば先生たちは、「時間がない」、「集まることができない」、ということが大きな理由です。これは日本でもよくあることですね。それからですね、例えば、管理職の人がどんどん変わっていく、そのことによって学校の方針や研修の方針がどんどん変わっていくということがあり、これが授業研究をやっていくうえで大きな問題になってきます。それから、先生が同じ学年を長く教えているという現状もあります。日本ではいろいろな学年を教えることを経験されますけども、アメリカでは例えば2年生の先生になったら2年生をずっと続けているという先生も多くいます。そういう状態であれば、例えば教材研究をしても2年生だけのものを調べ

てみる、という形になってしまいがちなんですね。日本では2年生で習うことはどういうふうな次の学年や高学年に行ったときにつながっていくかといった教材研究をしますけど、そういうことがなかなかできません。学年別に個々に動いていますし、学年の中でもまとまりがないです。完全に先生の

あたりはずれがあるような状態で授業が行われていることがあります。そういうことをなくすために授業研究をしなくてはいけないのですけれども、やはり先生たちのバックグラウンドが、2年生なら2年生しかないという状態で、なかなか難しいところがあります。

それから渡辺先生も言っておられましたが、子どもを育てるのか、教科を教えるのか、そこがすごく難しいところです。授業研究をやるにしても、何を教えるのか、どんなことを子どもたちができるようになるのか、という教科に関するところだけを見ているのです。子どもをどういうふうな育てるのか、ということが難しいです。特に日本ではいろいろな形で授業研究をしますけども、一番難しいのはやはり校内研修という形で、学校全体で子どもたちを育てていくということをする授業研究が大変難しいことです。先生が集まって、教科の壁なくやっていくようなそういう授業研究はなかなかできないという状態があります。だからそういうこともあっ



て、やはり何か教科の方に集中するような傾向があるのかもしれませんが。

つまり日本で行われている授業研究というのは本当にユニークなんです、世界的にみて。日本に住んでおられると、日ごろ、「これはやらなくちゃいけない」とか思っているかもしれないですけども、本当にこういう組織だったシステムというのは、他の国を見てもない。アメリカのように、ないところから始めるというのは本当に難しいことなんです。例えば、日本にいて、授業研究をやっていなくても授業を見に行く機会を作ろうと思えばいけますよね、そして見ることができる。そして話し合うことができる。そういうことで自分たちをだんだん「授業研究でもやろうか」という気持ちにさせるところがあるんです。アメリカでは授業研究をしている人がいないからそういう経験もできないのです。そういうような状態で始めるのは難しいのです。だから日本ではこの、自分たちが教師の力量を高めるために整っている研修システムをもっと活用して、もっと磨き上げるといいますか、

こういう授業研究をしたらこんな成果があがるのかですね、そういう研究もしながら、また、どうやったらより良く皆で授業研究をやるか、または、例えばどういう授業研究にすればみんなが、「ああ、いろいろなこと学べた」ということを感じられるような授業研究ができるか、そういうことを考えながら授業研究をやっていただけたらすごくよくなるのではないかと考えております。

最後に、Lesson Studyという言葉は英語になりましたけども、その過程で行われる「教材研究」という言葉はそのまま日本語でアメリカでも広がっています。「板書」という話をしますと、結構何かわかるアメリカの先生方も増えております。そういう形でどんどんどんどん日本の授業研究は広まっております。その分日本でも皆さんががんばって続けていただき、素晴らしい授業をつくり、また、先生の力量を高めていただければと思っています。



*講演会終了後にも参加者から多くの質問がよせられていました。

「間違いは宝である」という米国の先生の見
 を見て、自分と同じ価値観(私は、間違いはあ
 るけど間違いはない！と考えているが)を知り
 カづけられた。

プロレジャー?! 客観視(自分の盲点)できた。

授業研究を行いやすい職場にいるのだからもっと積極的になるべき
 だと思った。日本とアメリカの先生方が同じ授業を見て研究できる機
 会があるといいです。

世界の国々に注目されていることを自信にしたい
 と思います。自分自身を高めたいと考えます。

自信がもてます。参加者の声

海外から注目さ
 れている現状に
 満足することなく
 常に向上するよう
 努力すべきだと
 感じました。

日本ももっとがんばらなくてはとおもいました。

日本の授業研究を誇りに感じました。

日本の良さを再認識しました。学力にどうつなげ
 るかをしっかり見つめたいと感じました。

日本でも、学校によってはできていないところもあると思いますが、海外より
 授業研究が充実していることがわかりました。授業研究の大切さがわかりました。

他の国にはない。こういったシステ
 ムを大切にしていかなければなら
 ない。他の国がまねできないよう
 発展させていきたい。

高校の授業に対しての研
 究がもっとされてほしい

アメリカの Lesson Study に参加してみたい。

授業研究が単なる授業向上の
 ためのものではないということ

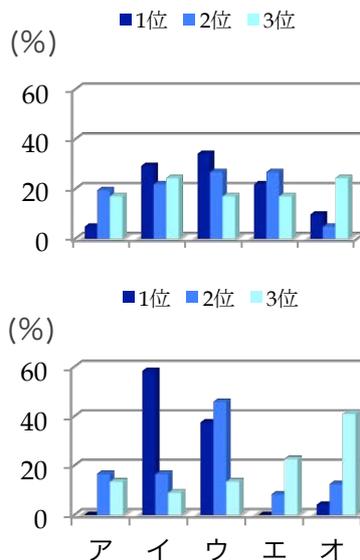
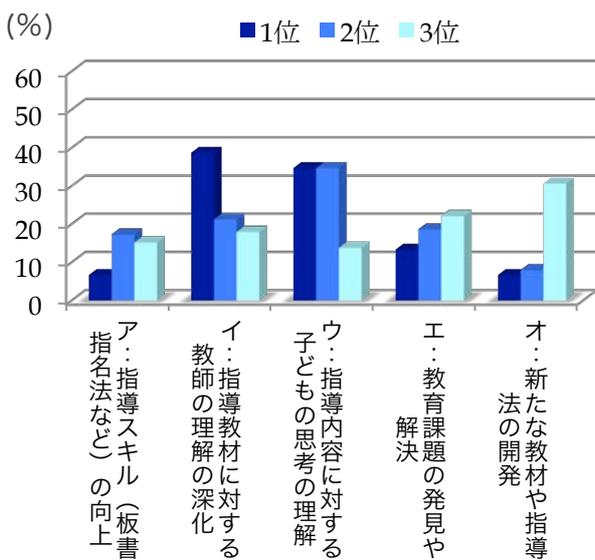
教材研究が大切だということ。
 それが認められていること。

反省しました。

意外

協会についてもど
 のようにしていくの
 が良いのか研究して
 いく必要があるのだ
 はないかと思いま
 す。2度教育実習に
 行ったのですが協
 議会の重要性と学校
 ごとの質の違いを強
 く感じました

<アンケート集計結果>あなたは、授業研究は何に対して有効だと思いますか。
 ア～オより3つ選び、重要だと考える順に答えてください。



大学生/大学院生の傾向 (42名)

附属/公立校教員の傾向 (27名)

プロジェクトからのひとこと&お知らせ

プロジェクト IMPULS にとって初めての大きなイベントとなりました。今回講演をいただいた3名の先生方は本プロジェクトの国外協力メンバーです。今後も継続的に国際的な研究協力の成果を発信していきたいと考えています。メーリングリストへの登録をご希望される方は、下記連絡先まで、①お名前②ご所属③メールアドレスをお知らせください。なお、8月3日～12日にはシカゴにて授業研究サマーセミナーが開催されます。学芸大からは、本プロジェクト代表である藤井先生、シカゴのデポール大学から特任教授として招いている高橋先生の他、附属学校の先生方や大学院生も参加する予定です。